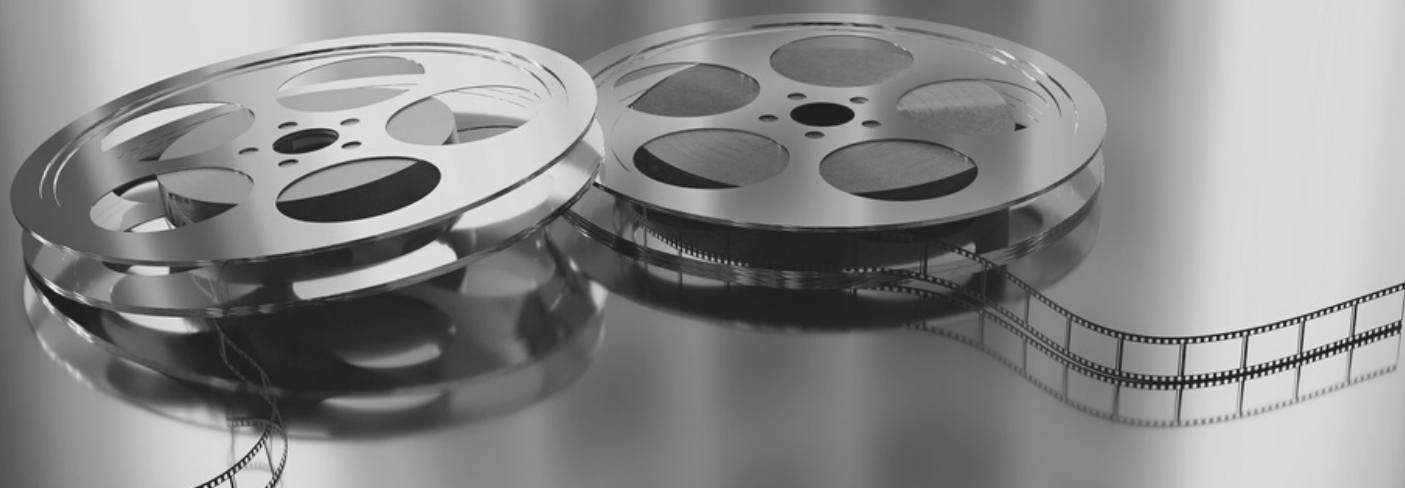


シネマ通信

第5号（2022年9月23日）



3つの鍵

第5回鑑賞作品

監督・脚本：ナンニ・モレッティ

原作：エシュコル・ネヴォ

出演：マルゲリータ・ブイ、リッカルド・スカマルチ、アルバ・ロルバケル、アドリアーノ・ジャンニーニ、エレナ・リエッティ、ナンニ・モレッティ

閑静な住宅街のアパート。隣人たちは互いに顔見知り程度だが、それぞれの日常は静かに流れていた。しかしある夜、アパートに車が衝突し女性が亡くなる。運転していたのは3階に住む裁判官夫婦の息子アンドレだった。2階のモニカは夫が長期出張中のため、一人で出産のため病院に向かうところだった。1階の夫婦は仕事場が崩壊したので、娘を朝まで向かいの老人に預けることにした。この小さな選択の過ちが、家族の不和を引き起こし、次第に彼らを追い詰めていく。巨匠モレッティが3階の父親を演じるほか、マルゲリータ・ブイをはじめ、名だたる名優たちが共演。現代イタリア映画の底力を感じさせる作品となっています。

ローマの高級住宅街。
同じアパートに住む
3つの家族。ある日、そ
の日常が歪み出す。

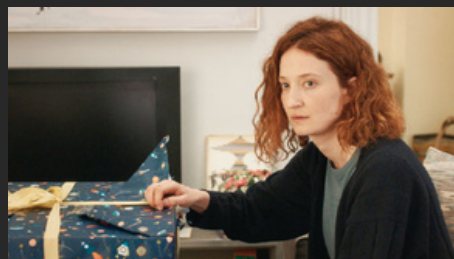


About Them

「3つの鍵」の監督：ナンニ・モレッティは、1953年北イタリアのトレンティーノで、教師の両親の下に生まれました。学生時代には映画と水球に熱中。20歳で短編映画を撮り始め、1976年に最初の長編映画を発表（日本未公開）。以来、監督、脚本家、俳優として活躍し、1977年に俳優として出演した「父・パドレ・パドローネ」が、カンヌ映画祭でパルム・ドール（最優秀作品賞）を受賞しました。

”イタリアのウディ・アレン”と評されるように、皮肉とユーモア満載！洒落なオリジナル作品で知られるモレッティですが、本作は原作を生かす真摯な語り口。イスラエルの作家：ネヴォのベストセラー小説を映画向きに再構成し、映像作家としての力量を余すところなく発揮しています。

40歳にして世界三大映画祭すべてで賞を受賞した経歴の持ち主。2001年に監督・主演した「息子の部屋」でパルム・ドールを受賞し、'12年には審査委員長を務めるなど、カンヌ映画祭の顔ともいえる存在です。自国では映画館主としても活躍中とか。”映画人”として、望むことは全部成し遂げてきたウラヤマシイ69歳。目下は、次回作の喜劇に燃えています。



About Something

あの【ローマの休日】にモデルが居たのをご存じですか？それが、元英空軍の英雄：ピーター・タウンゼント。彼は、マーガレット王女（エリザベス二世の妹君）との婚約が周囲の反対で解消となった後、作家となり子どもの戦争被害を告発。長崎取材中に谷口稜嘩（スミテル）さんに出逢い、16歳の時自転車で郵便配達中に被爆し、背中に瀕死のやけどを負ったという彼の体験を【THE POSTMAN OF NAGASAKI】として出版しました。「長崎の郵便配達」はタウンゼントの娘：イザベルが、長崎で亡き父の足跡を辿るというドキュメンタリー映画。地味な内容ながらロングランとなったこの映画を、私は最終日近くに、やっと見る事ができました。父が歩んだ長崎の坂道、港が見える丘、そして自転車に乗る少年の幻影。重いテーマなのに爽やかな印象が残るのは、全編に父と娘の静かな魂の交流が感じられるからでしょう。

”原爆”に関する体験で私が一番ショックを受けたのが、40余年も前のテレビ番組。その中で元米軍パイロットが発した『もし、日本が原爆を持っていたら、もっと早く使ったと思うよ』という一言です。それまで私は単純に、日本は被害者だとばかり思っていたのです。しかし、当時の日本を考えれば、確かに彼の言う通りでしょう。

現時点で、核保有国は8ヶ国。各国の内部事情は分かりませんが、おそらく、トップの8人がON・OFFボタンを握っているのでしょう。地球上の全生命の存続が、この8人の理性に委ねられているのです。コロナ禍で日常の有難さを再認識した私たち。しかし、その大切な日常も、薄氷の上に成り立っているのかもしれないね。